

Title	「世紀」 : 同世代に反響する「彼は昔の彼ならず」
Author(s)	小澤, 純
Citation	太宰治スタディーズ. 2010, 3, p. 18-20
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/97692
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

「世紀」

—— 同世代に反響する「彼は昔の彼ならず」

小 澤 純

「世紀」は一九二四年四月に創刊されたが、淀野隆三「文芸時評」が「文芸復興に就いて・二三の作品その他」から成り、また同人の過半数が参加した「文芸座談会」のトピックが「文芸復興」に就いて・作家の生活に就いて・詩の問題について・批評の問題であることは、この文芸同人誌の特色を知る指標となる。出発期の同人を列挙すれば、主に「青空」「小説」「麒麟」から合流した浅沼善美・浅見淵・青柳瑞穂・飯島正・緒方隆士・尾崎一雄・小田嶽夫・川崎長太郎・北川冬彦・蔵原伸一郎・古木鉄太郎・竹内道之助・田畑修一郎・外村繁・中谷孝雄・丸山薫・三好達治・淀野であり、編輯後記」では「同人二十人、我々は必ずしも文学上の主義主張を同じくする者ではない」が、「今日リアリズムの問題がわが文壇の重要な関心事」であることが共有されている。淀野は「文芸復興」の呼び声から半年以上が経つ現在「文学界」「文藝」「行動」や多くの同人雑誌が創刊され、その中に「世紀」も含まれることも確かだが、出版に目を移せばドストエフスキイ・チエホフ・ジイド・バルザック・ゴーゴリなど海外文学の全集が次々と刊行され「真面目な読者」に売れているという事実には「文芸とその読者公衆の間」を考える糸口があると述べる。これは、「世紀」を牽引する淀野自身がブルーストを始めとしたフランス文学の翻訳者であり、多数の海外文学を刊行する三笠書房が同誌の発行元であることと繋がる。

また淀野が北川らと共に急激に左傾しプロレタリア作家同盟に所属した過去を持ち、「文芸復興」を「読者」が「プロレタリア文芸に飽きて来た」末路と捉えることを拒む態度を垣間見ることもできる。例えば和田伝「村の次男」(改造一九三三・三)の「読者は作者の同情に導かれて、農民の苦しみをじっくりと味わつ」面に焦点が当てられるのであり、「文芸復興座談会」(文藝春秋一九三四・三)における佐藤春夫の「歴史物を書かざるを得ない」の言に強く拘泥するのである。座談会で口火を切るのも淀野だが、「文芸復興」について、やはり「文学者の生活」；社会の動向と文学との関聯」が「プロレタリア文学の問題」へと繋がるように促す。しかし淀野の気負いを尾崎や川崎らがはぐらかしていくことも事実であり、結局は外村に「正し」さとしてのみ回収されるのである。その齟齬は「詩」をめぐる淀野・北川と三好・中谷の対立においてより明瞭となる。それは、彼らが青春を共有した「青空」の記憶、夭折した梶井基次郎の影を想起させずにはおかない。実際、「世紀」誌上では梶井の全集の広告のみならず多くの追憶が掲載

されていくが、その『梶井』像は、六月号の「虚構」(中谷)と十一月号の「感情のリアリテ」(淀野)の間で揺れていると言えるだろう。

五月号では、「文芸復興」の内実を問うかのよつに、同人で分担して「創作時評」を始める。「改造」「行動」(尾崎)、「文藝春秋」「文藝」「三田文學」(中谷)、「世紀」「中央公論」「新潮」(浅見)、同人雑誌評(外村)だが、「ここで」「世紀」をメジャー誌に並べる野心は見逃せない。この時評において、尾崎は「鶴」(一九三四・四)を取り上げ、太宰「葉」の「自我の感傷」・「自我の高揚と陥没の交錯」を好意的に紹介する。同月号に淀野は「リアリズムに就いて——」枯木のある風景——」を書き、宇野浩二／フロベールの「リアリズム」に対抗するはずの武田麟太郎の「リアリズム」に死角を見出し、却って宇野から学ぶべき点があることを示唆している。六月号も引き続き、「改造」「行動」(丹羽)、「中央公論」「文藝春秋」「世紀」(中谷)、「新潮」「文藝」「三田文學」(小田)、同人雑誌評(外村)が掲載され、新人までの小説が具に吟味されていく。しかしこの網羅的な時評は同人に負担をかけたのか、結局七月号ではまた淀野一人の「文芸時評」に戻っている。そこではまず徳永直の「リアリズム」が点検されるのであり、次に宇野の近作を宇野自身の強度を用いて判断、さらに新人達の諸作を幅広く視野に入れていく。初期の「世紀」は淀野の「文芸復興」への批判的な眼差しに方向づけられているとも言えるが、しかし七月号からは同人外の寄稿が目立ち始める。中島栄次郎「青春の文学に就いて」、山岸外史「泉鏡花から」、長崎謙一郎「私小説に就ての感想」、古谷綱武「浅見淵氏の芸術」がその嚆矢となるが、続く八月号には保田與重郎「現代のために」と山岸「一ぱいの麦酒」が掲載されるのである。保田は「古典は外にはなくうちにあ」り、「現代の場合に於ては、むしろその楽屋があらはであり、その人の楽屋にいや応なしに感動しがち」であることと指摘——自らと、淀野の標榜する「リアリズム」に風穴を空けようとする。また山岸の評論には「少し眠い世界で書いた文字、なかば起きなかば眠つてある心理の文字」という副題が添えられ、一切改行のないまま、「こつこつ同人雑誌の流行することは、決して文芸復興ではなく、却つて不健康な時代かも知れない」と思い至るまでの長い思弁が書き連ねられた。

こつした中、同人の他に保田・山岸・神保光太郎が参加する「現代作家批判座談会」が九月号に掲載さ

れるが、口火を切る役が淀野から尾崎へと代わったことは象徴的だ。トピックもまた 宇野浩二氏に就て・横光利一氏に就て・川端康成氏に就て・小林秀雄氏に就て であり、かつての座談会にあった批評基盤自体への問いから遠く離れている。座談会の終盤で神保が「小林秀雄氏は狭い範囲の批評家ではないかな」と漏らすに至る転倒は、創刊時に淀野が目指した道が、同誌において閉じられたことを証して余りある。そして翌月、「世紀」一〇月号に太宰「彼は昔の彼ならず」は掲載される。中谷「思い出の人」(大陽一九七一・八)によれば、尾崎・浅見と「相談」して依頼したようだ。「編輯後記」には「同人外ではあるが定評のある太宰治氏の力作を得たことは、編輯者の得意とするところ(浅沼)とあるが、その「得意」のすぐ横に、川崎長太郎「転向」が掲載されているのは興味深い。川崎は、今日の「転向」と初期プロレタリア運動から離脱した自身の過去を「自惚れ」と断りながら重ね、しかし「嘘にも一度左の洗礼をつけたものには、その痕跡があざのやうに中々消えない」と漏らしている。この雑文に凶星を突かれた関係者もいたのではないか。いわば「日本浪漫派」の中核を担う執筆者達が誌上を席卷することと連動して、「昔の彼」と「彼」の同定を拒む表題を持つ太宰のテクストが同誌に刻まれることとなった。それは、同世代の文学青年達の動向を端的に捉えた「コピー」と言えるかもしれない。「彼は昔の彼ならず」が、冒頭で親しく「君」に語りかけ、末尾では「ここにゐる僕」と「あの男」の同質性に愕然とする小説であることは意味深長だ。中谷は緒方を誘い率先して「日本浪漫派」を組織し、淀野もまた同人に名を連ねることになる。翌年四月をもって「世紀」は終刊し、中谷達とは距離を置いた同人達が中心となって「木靴」が創刊される。しかし、「世紀」に集った「主義主張を同じくする者ではない」同人から芥川賞作家(尾崎・小田)や多数の候補(緒方・川崎・田畑・外村・中谷)が生まれていく事実、「リアリズム」を吟味し続けた淀野の懸念とは別の角度から「文芸復興」を点検する端緒となるだろう。最終号に載った丹羽「犀星鼻肩」は、「何ものにも毒されず、掣肘されない純粹の形で最初の踏切りをしてゐる」と、宇野と並び「文芸復興」の象徴となる至生犀星の小説「詩」を絶賛したが、結びは以下の通りである。

由来、鼻肩とは引き倒しの場合が多いものであるが、鼻肩はされるものよりもするものゝ方が愉し
 みのである。